

世田谷区基本構想審議会第1部会（第2回） 議事要旨

【日 時】 平成24年5月26日（土） 午前10時～正午

【場 所】 世田谷区役所第3庁舎3階 ブライトホール

【出席者】

- 委員 森岡清志、宮台真司、宇田川國一、松田洋、上島よしもり、桜井純子、小林正美（第2部会）、永井ふみ（第2部会）、上野章子（第3部会）、田中優子（第3部会）、以上10名
- 区 宮崎政策経営部長、小田桐政策企画課長、澤谷財政課長、田中政策研究担当課長

【議事概要】

※大杉部会長、竹田副部会長ともに欠席されたため、森岡審議会会長が座長を務めた。

《主な意見》

松田委員からの進行の提案があり、基本構想の構成要素について、議論を行った。

（1）全体の構成について

- ・基本構想の構成要素について、現在の基本構想から考えると、「はじめに」、「意義と役割」、「理念」、「実現の方策」といったところは今後も必須であると思う。一方、「将来像」については、「～のまち」という表現になっているが、今回の基本構想ではこのような（総論的な）表現ではなく、重点的に「これをやる」といった表現に変えるべきではないか。
- ・他の自治体の基本構想が例示されていたが、これでは住民統合や動機付けの機能は果たさない。もっと力強い理念と、徹底したリアリティがなくてはならないと思う。どのような価値や理念が必要かを了解するための徹底した現状認識と、価値や理念の実現のために何をすればいいのかというリアリティが必要だ。

（2）「はじめに」（策定の背景）について

- ・現在の基本構想に世田谷区の歴史が謳われていないのは問題だ。安全・安心・快適・便利という価値は人間の尊厳と結びつかない。住民が、（たとえ便利快適でなくとも）世田谷区でなければ嫌だという固有のコミットメントが必要だ。それには街の沿革、歴史が重要であり、人（の快適便利、安全安心など）ではなく、場所を主体に考えるべきだ。世田谷という街はどのような生き物なのか、徹底して見つめることが必要だ。
- ・建築の世界では、地霊（ゲニウス・ロキ）という言葉がある。その地にしかない記憶、歴史、生活等（土地柄）といった意味だ。世田谷区でも景観といわず、風景という言葉を使っているが、単なる見ばえではなく、その地の歴史や沿革を重視している。

（3）「理念」について

- ・（理念を語る表現として）例えば単に子どもにとって住みやすい、だけではなく、子どもにとって輝く街、という価値が謳えるとよい。子どもにとっては安全・安心よりもワ

ンダーランドであることが大事だ。

- ・(前提とすべき理念とについて)「津波てんでんこ」を噛み砕いてパラフレーズすると、三点に要約される。(1) マニュアルを信じるな、(2) その場での最善をつくせ、(3) 空気に縛られるな。要するに、依存するな、自分で考えてベストを尽くせということだ。依存からの自立、脱マニュアル化は非常に重要だ。
- ・一番大事なのは、3. 1 1以降の世田谷はどうするべきなのか、を議論し、理念を形作る必要がある。
- ・かつて「福祉の世田谷」といわれたときは、人権を守ってくれるあたたかいまち、といったブランドイメージがあったと思う。今まで子育てしやすい、子育てしやすいというサービスの表現を使ってきたが、これも改め、子どもがかがやくまち、といった世田谷ブランドの確立を図っていきたい。

(4) 「将来像」あるいは重点的な取組みについて

- ・「～なまち」という表現ではなく、重点的に取り組むべきことを語る。そこにリアリティを絡ませていくという構成ではないか。
- ・武雄市の基本構想の紙芝居を見ると、風景が世田谷区とぜんぜん違う。将来像という項目は、区民と理念と施策を共有していく上で大事だ。
- ・例えば地域のお祭りに私立の中学生、世田谷在住ではない子も参加させるような、世田谷の地域性を濃密かつ開かれたものにしていくことが必要だ。
- ・私立中学校へ4割の子どもが進学している。これを公立へ引き戻そうというのではなく、私立の子どもも世田谷っ子だと思えるような輝く場所の創造が必要ではないか。
- ・子育て世代の流入誘導は、メリットが大きい。今後も政策として続けていくべきと思う。子どもが公立学校に通うことで、母親を中心としたネットワークが形成されていく。

(5) 「実現の方策」について

- ・基本構想の(実現の)方策のところだが、理念を實際行動に移していくことを担保する仕組みが必要ではないか。PDCAサイクル、最近ではPDSAサイクルとも言うが、そういったことを構想の中にも位置づけられないか。
- ・依存やマニュアルからの脱するために、どうやって自立していくべきか、区民への積極的な働きかけが必要ではないか。

(6) 進捗管理、周知や啓発の手法、その他

- ・こうあるべき、と語られた理念と政策を、実際にどうやって回していくのか、チェックしていくのか、という手段が担保されないと、絵に描いた餅になると思う。
- ・ハコモノを作る際の何のために作るのかの理由説明があっても、何のために使えるのかということが明らかにならず、無駄なものができることが多い。PDCAのチェックにかかったものは徹底して見直すことが重要だ。
- ・継続性、持続可能性、といった視点から考えると、住民参加は作るときだけではなく、住民が主体的な責任感を持って、その後もそれを守り、チェックしていくことこそが重要ではないか。

- 区民によるチェックを継続させるためのキーワードは、私権の制限と投資家のチャレンジではないか。投資家は個人で投資しているがゆえに、短期で収益が上がらないからといって撤退はしない。住民によるチェックが働かないのは、私権の制限がないから、例えば不在地主の意思が市場原理の元で強く反映され、街のことを思っている住民の意思が反映されない、ということが起こる。
- 基本構想は紙芝居のような文言以外の表現も必要ではないか。
- 基本構想の理念の浸透を図る際に、Q&A集が大事ではないか。カトリックの教義問答集のようなものがあるとよいかももしれない。
- 住民の中に行政が入っていき、現在の法や条例の限界や抜け穴といったものについて、住民とコミュニケーションしながら、「そういうこともできるのか」という知恵を集約すべきだ。
- 行政はルールメーカーであるべきで、民間のチャレンジに期待すべきだ。行政がルールを変えていくことは、市場任せにしていくこととイコールではない。うまくパラメータを設定して、「社会によいことをすれば儲かる」というルールで、事業者を誘導していくことができる。